

# 韓国英語教育視察旅行報告書

2006/08/22－2006/08/24

## はじめに

TOEICのスコアをみても、近年の韓国の伸びはめざましい。韓国では、英語教育が小学校3年生から必修で、英語教育に対する熱い思いが伝わってくる。更に2008年度からは小学校1年生から英語教育を始めるという。韓国では実際どのような英語教育が行われているのか、実際に現場の英語教育に携わる方々とお会いし、実状を見聞し、日本の英語教育の改善に役立てようと、今回の視察旅行を企画した。ご支援を賜った英語教育振興財団に深く感謝し、以下ご報告致します。

## 2006年8月22日（火） 第1日目

### 1. Yonsei University Underwood International College訪問

かねてより面識のあったYonsei University Underwood International CollegeのDean Dr. Jongryn Mo、Assistant Dean Dr. John M. Frankl、入学担当のMs. Youngsun Choと懇談をした。

予め、メールで問い合わせしていた内容を中心に韓国の英語教育に関する意見交換をした。以下は質問とそれに対する回答である。

1. How many universities are there in Korea?  
200
2. How many students out of senior high schools go to universities?  
82%
3. What careers or opportunities do they have after graduation?  
非常に就職状況は良くなく、多くの若者が海外に留学する。  
2004/05の調査ではアメリカで勉強している学生数は53,358でアメリカに留学する外国人学生の9.4%を占めている。
4. What kind of entrance tests should they take?  
統一試験、Academic Aptitude Testとinterview testがあり、口頭試問と一般的な面接を行い合格者を決める。
5. What is Korean SAT is really like?  
これに関しては、ソウル教育大学のリー博士から実際の英語の試験問題を入手したので後日検討。また市内の本屋で問題集を購入したのでこれも後日検討することとする。
6. How good is the university students' English ability?
7. What is the average TOEIC score of the university students?  
TOEFLのスコアは217である。
8. What is the general curriculum of university?
9. What is the university life like in Korea? Do they study hard?  
日本の大学生とは異なり、よく勉強する。

以下の質問に関しては最終日のリー博士のとの懇談に詳しいので後に述べることとする。

10. How does the government train teachers?
11. What kind of qualifications is required to become English teachers?
12. What is an English curriculum in elementary, junior, senior high schools and college?
13. What kind of English lessons are given at college?
14. How do you train students who want to be English teachers?

韓国の学生は有利な職につくために英語能力は必修と考え、以前は大学院から英語圏で学ぶ学生が多かったが最近は大学から英語圏で学ぶ生徒が増えている。また、韓国の経済力の後押しもあり、子供の教育に投資することを惜しまない親が増え、小学校以前の子供も海外に出かけるようになった。英語力をつけるという点では、公的機関ではまったく英語力をつけるにいたっていない。子供の英語力がついているのは塾、tutoring academyのお陰であると述べていた。親の英語力をつけるのに金に糸目をつけない姿勢は、irrationalと言っていた。

韓国が国際社会で競争力をつけるためには、英語、韓国語、中国を流暢に話すことが不可欠で、そのために、政治が韓国では小学校から英語教育を特化すると決めた。政治が決めたことであるので、それに従い教育制度が動いている。国土が狭く、仕事も限られ、いい仕事に就くためには語学力は不可欠でそのためには親は出資を厭わない。

学校から帰って4時間ほど塾にいき、それでも足りないようであると家庭教師を雇い多額のお金を支払っている。親の経済力と子供の学歴が正比例する日本とまったく同じ構図である。

1時間あまり懇談した後、学生によるキャンパスツアーを行った。広大な敷地に立派な校舎が並んでいる。私立大学といっても学費は年間20万円くらいである。奨学金が充実しているということもあるが、総じて韓国は教育費が安い。国立大学にいたっては無償である。

## 2. 市内書店での英語教科書、Korean SAT問題集購入

延世大学見学後は市内の本屋で、英語の教科書とKorean SATの問題集を購入した。英語の教科書は小学校3年生から使用しており、きちんと科目として教えられているのがよく分かる。教科書はすべて無償であるが、生徒が家と学校において置くために余分に購入するために本屋で販売している。

Korean SATの問題集は山積みになっていて、修能と現地の人はいうようだが、大学入試は修能と内申書の点数で決まるため、高校時代に留学等は内申書に不利になるため考えられないという。そのため大学で海外に留学する学生が多いのか。

延世大学は、海外で学ぶのと同じカリキュラムを備えているが、学費が安く、経済力のない学生でも英語力をつけるのが用意になるとの意図で設置されているが、韓国の英語熱を考えると、それでもやはり海外で学ぶ生徒は増え続けるのではないだろうか。

## 2006年8月23日（水） 第2日目

### 1. 敏廷(サミョン)学園高等学校訪問

Yong Sook校長の話を伺った。

学園は1937年に敏廷(サミョン)女史によって開学し、1997年に現在の場所に移転した。経済的に厳しい家庭が多く、給食費の未払いが約20%ある。授業料の請求をすると人権侵害と

ということでインターネットに掲載されたこともある。学区には障害者用永久賃貸住宅がある。

また、中国を視察したところ、多くの学校にプラネタリウムがあった。本校も科学教育に力を入れるために理科校舎を建設した。英語教育の視察ならば中国を勧める。中国の高校では英語教材として英文週刊誌**TIME**を使っていた。

先日、姉妹校の玉川聖学園の生徒が訪問した。生徒はあまり英語で話せなかった。(2006年5月17～19日まで高等部2年生が韓国修学旅行中に訪問)

教室にはインターネットと大型スクリーンがあり、教員はノートコンピュータを持参し、CD-ROMやインターネットを活用している。8月21日(月)から2学期が始まっている。

(生徒数は共学で1307名。校内LAN整備率:韓国100%、米国93%、英国82%、日本51%、東京は全国最下位で19.5%)

高校2年生の英語の授業を参観した。大型スクリーンにパワーポイントで課題が映し出され、夏休みにどのように過ごしたかをそれぞれ英語で発表していた。そのあと、英文のイントネーションやアクセントなどを考えさせて指導していた。例えば、**white house**, **black board**, **English teacher**, **light house**などの語句がアクセントの位置によって意味が変わること、**plane accident**, **plain accident**の聞き取り、**1. Giver a hot dog. →Give her a hot dog. 2. Johnid savedim. →John had saved him. 3. Willy have a hamburger? →Will he have a hamburger? 4. Izzy at home?→Is he at home? 5. Mommid never seener. →Mom had never seen her. 6. Didja go?→Did he go? 7. Didncha know?→Didn't you know? 8. planet→plan it 9. letter→let her 10. attackson city buses→a taxi and city buses**などを生徒は相談しながらワークシートに書き込んでいた。実践的な英語学習であった。英語が使われている場面がはっきりしていなので難しい語句もあったが、生徒はよくできていた。6班あり、女子8名、男子12名合計20名であった。授業態度は大変よく、教師の指示に従って一生懸命に取り組んでいた。エアコンが設置されていた。

## 2. 敏廷(민정)学園中等部訪問

女子中等学校を訪問した。英語科の**Jeong**教諭などの話を伺った。

英語の授業は週5時間ある。教科書の採択権は学校にあるが、半分の生徒には易し過ぎるので、2つのレベルに分けて指導をしている。授業では付属のCD-ROMやインターネットを活用している。保護者のレベルは高い。付属中学であるが、かならずしも隣接の高校にいけるとはかぎらない。無試験だが、コンピュータによる抽選で振り分けられる。日本の漫画やアニメが人気があり、中学の選択教科として日本語を勉強している生徒もいる。

(中学3年生の教科書は312ページあり、英文の量では日本の教科書の約10倍ある。生徒数女子のみで1155名)

## 3. 京畿道英語村(GyeongGi English Village)

韓国の国策である「国際的な韓国人(Global Koreans)」育成のために、学校での英語教育の補完施設として、**GyeongGi**県が約8500億ウォン(104億円)をかけて英語村を2004年11月に開設した。韓国初の英語村である。韓国はすでに小学校3年生から英語を教科として学

習している。2008年からは小学校1年生からも学習する。

英語ができることはステータスであり、条件の良い仕事に結びつく。そこで、英語学習熱が高く、留学する子どもも多い。母親同伴で留学するケースもある。こうした英語熱に支えられて韓国内に英語だけで生活できる施設の開設が望まれていた。1日コース、週末コース、1週間コース、4週間コースがある。県民はかなり安い費用で利用できる。低所得者の師弟は無料。日本人も参加可能。

午後4時からChoi女史の案内で見学をした。ストーンヘンジを模した玄関を通ると実際の入国管理事務所のような入口を通る。パスポートを渡され、すべて英語で話すことを約束する。約束を破った場合は警察官に逮捕され刑務所に入れられることもある。**Situation**を大切にし、買物・飲食・料理などすべて英語を使う。幼児や小学校の低学年の授業を参観したが、外国人教師の指導で楽しく学習していた。

英語は学習していても一度も外国人に触れたことのない子どもがいる。英語村は外国人への恐怖心をなくし、文化や習慣などを体験することにも役立っている。英語学習の動機付けには大変効果があるが、そのあとのフォローをどのようにするかが課題である。教師はBA以上で有資格者を英語圏から採用している。

#### 4. 韓国の小・中・高校

漢南(ハンナム)旅行通訳が1人の朴淑子(パク スクジャ)さんから韓国の教育事情を伺った。高校1年生と中学3年生のお子さんがいらっしやる。保護者の視点から伺うことができたのは有益であった。

韓国の小・中・高校には学区がある。学区内のどこの学校に進学するかはコンピュータによる抽選で決まる。したがって、学費は公立私立とも同じである。公には認められていないが、学区間に学力格差がある。ソウルではほとんどの住宅が高層アパートで、朴さんの学区には約6000世帯がある。ソウルでは第8学区がトップで、家賃やマンションの価格が一番高い。一般高校は無試験で入れるが、芸術・科学・外国語などの特殊高校には試験がある。中でも外国語高校は人気が高く、数年前までは中学での成績が4%以内でないと入れなかった。近年、外国語高校が増えたので、多くの生徒が入れるようになった。

通常、朝7時50分までに登校する。校門では教師が遅刻者の指導をしている。8時10分～11時10分まで50分間授業で3コマある。給食は高校にもあり、食堂で食べる。中学は原則、全員給食だが、高校では弁当を持参することもできる。

12時50分から2、3コマの授業がある。午後3時半か4時頃帰宅する。朴さんのお子さんは民間のテニススクールで汗を流したあと、午後6時～10時まで塾に行く。塾によっては7時～11時。1科目を教える単科学院と複数科目を教える総合学院があり、スクールバスで送迎している。「学院」とは塾のことである。こうした塾に約80%が行っていて、月謝は約70万ウォン(8.5万円)である。また、1本1本毛を抜くように個別指導ができることから、「毛抜き」家庭教師といって、家庭教師を雇う家庭もある。中学生はソウル大学やヨンセイ大学の学生が家庭教師をすることが多い。高校生はEBS(韓国の教育番組)などで人気のある教師が学校を辞め、塾や家庭教師をするケースがある。その場合の月謝は破格で、約600万ウォン(73万円)である。

大学入試は韓国SATと内申・面接によって決まる。内申は5教科か音楽・美術などの実技教科も加えるかは大学によって決まっている。いずれにしても高校3年間の学習の成果が大きく影響するので、留学などは長期休業中か中学までに済ませている。大学進学率は82%。不況のためか公務員志向が強く、清掃局職員に大卒が応募し話題になった。女子大生の就職希望のトップは教員である。男子大学生も教員志望が強い。教師の初任給は180万ウォン(21.9万円)で比較的高く社会的地位も高い。

## 2006年8月24日（木） 第3日目

この日は午前中にソウル教育大学のDr. LeeWonKeyの研究室を訪問した。ソウル教育大学は1980年より四年制大学となり教員免許取得の課程を持つようになった。大学の雰囲気は第1日目に訪問した延世大学と随分異なっていた。校舎の外観も学生の身なりも延世大学のような華々しいものではなく、むしろ質素であった。国立大学あるいは教育大学らしい一面なのかもしれない。

お話を伺うことができたDr. Leeは、言語教育、特に言語テストの専門家であり、韓国の英語教育政策に深く関わっている権威でもある。日本のセンター入試にあたるKorean SATの作成、韓国の小学校英語カリキュラムに対して中心的な役割を果たしておられた。この日は韓国の教育事情についていろいろなお話を伺うことができ、それらに対するDr. Leeのコメントもいただいた。ここでは、主な話題となった韓国の教員養成システム、Korean SAT、小学校英語の三点について報告したい。

### 1. 韓国の教員養成システム

韓国での教員養成は11の国立大学が担当している。ソウル教育大学では、学生は資格を取るために140単位以上を取得し、2年、3年、4年と実習を経験しなければならない。特に3年次、4年次には前期・後期それぞれ二週間ずつの実習に行くので日本と比べて教育現場での実習に非常に重点が置かれていることがわかる。

また小学校英語を制度としている国なので、小学校の教員になるためにも英語が必修として課せられている。Dr. Leeによるとソウル教育大学に入学する学生は優秀な学生ではあるが、それでも英語を話す能力はまだまだ十分ではなく、教員養成の課程の中で鍛えていく必要があるだろう。

韓国では教員は社会的地位の高い職業として認識されており、民間企業を辞めてまで教員になりたいという者も多いという。我々がこれまでビデオや実地訪問を通して感じた韓国での教員の権威の高さを考えると、なるほどとうなずく話だった。

現在、日本でも課題となっている現役の教員の研修についても質問をした。現役の教員に対しては、大学が研修を担当するのではなく、各自治体で研修を持つということだった。したがって大学はこれから教員になるという学生の教育に特化している。これからの教員は大学が養成し、すでに現場で教えている教員は自治体が研修を行うといった住み分けができている。このことから現役の教員の研修制度については州や市、そして学群によって大きくばらつきがあることが予想される。

### 2. Korean SAT（大学修学能力試験）

韓国では公立、私立に関わらず大学に入学する際に統一試験を受けねばならない。これが大学修学能力試験、または「修能」と呼ばれるもので、英語ではKorean SATと呼ばれている。名称からわかる通り、アメリカで大学入学時に受ける学力試験SAT (Scholastic Aptitude Test、修学適性試験)をモデルにしてはいるが、韓国版は国が行う統一試験であり日本のセンター試験に近いものと考えた方が適当だろう。

Korean SATの問題作成、運用はKorean Institute of Curriculum and Evaluation (KICE)によって担われており、Dr. Leeも問題作成に関わっている一人である。英語の試験は全部で50問。そのうち33%にあたる17問が聴き取りの問題だ。Dr. Leeに2002年度の試験問題のサンプルをいただいたが、難易度はさほど高くない。むしろ日本のセンター入試の方が問題数も多く難易度も高いように思われる。したがってこれだけで大学の入学の判定をするのはおそらく難しく、そのために内申書、面接などが課せられているのだと予測できる。

なお、Korean SATの問題と解答はKICEのホームページ (<http://www.kice.re.kr>) からすべてダウンロードできる。ただし、ホームページはすべてハングルで表示されているのでここに行けば問題がダウンロードできるのかすらわからなかった。

### 3. 小学校の英語

韓国では、小学校でも3年生から週一時間の英語の授業を受けることになっている。これは日本のような「総合的学習の時間」の中で行われる特別活動でもなく、道徳のような「領域」でもない。「教科」として英語の授業が行われている。しかしながら小学校の教員の英語能力や指導技術にはばらつきがあるようで、そのために国が作った国定教科書を使用している。Dr. Leeはこの教科書の監修者であり、教科書の完全パッケージを見せていただくことができた。

教科書は学年ごとにわかれており、CD-ROMが付属している。これは英語で効果的に授業をすることができない先生でも、CDを流しておけばなんとか授業が成立するようにと作られたものである。考え方としてはNHKの「えいごリアン」に近い。教科書にはほとんど文字がなく、そのため授業はどうしてもオーラルコミュニケーションが中心にならざるを得ない。これも教科書製作者の意図である。もちろん教員用のマニュアルは存在し、細かく指示や活動のやり方が書かれてあった。この教科書のシリーズは、1ユニットを1ヶ月で終えるようにデザインされている。

教科書は市販されているとのことで再び市内の本屋に立ち寄ったのだが、ちょうど新学期の始まりという時期と重なったためか在庫がないと言われ入手はあきらめたのだ。

最後にDr. Leeは、英語は韓国人にとって「地位の高さを示すもの」であるという現実的な見方を提示された。しかしながら、英語を学習することは「韓国人のものの見方を広げてくれる」役割があるという点をより強く強調されていた。それは、韓国の尺度だけでものを評価するのではなく、外部からの視点を持つことで、より国や人が豊かになっていくのだという信念の表れのように感じた。

Dr. Leeとの懇談は具体的な資料を見ながらのものであったため、大変わかりやすく意義のあるものだった。Dr. Leeは韓国の言語政策の中核にいる人物でもあったため、国レベルでの英語教育への取り組みを様々な事例をあげて説明して下さった。我々にとってはどれも得難い情報であった。またDr. Leeの真摯な教育への思いを聞けて、同じ教員として教

えられた思いがした。すでに学期中でこの日も授業があったにもかかわらず、時間を割いて丁寧にお話しただいたことに深く感謝している。

ソウル教育大学を後にして空港に向かうまでの間、我々は世界文化遺産である昌徳宮を訪れた。中国の王宮を思わせるような荘厳な作りに圧倒されると同時に、この場所が王宮として使われることがなくなったのも日韓併合によるものということもあり、韓国の歴史の厳しさを垣間見た気がした。こうして3日間のほぼ全日程を消化し韓国を後にした。

## 最後に

延世大学のMo先生は、「学校は何も教えない」「塾がすべて教えている」、韓国の親は英語力を子供につけるために、何でもする。その姿はirrationalであるという。それに対し、ソウル教育大学のLee先生は、英語教育は、子供のhorizonをexpandするもので、thinking diversityを持たせる。英語教育と韓国語教育は競合するものでなく、相互に補完するものである。英語以外の教科は韓国語で行われており、韓国語が廃れることはない、と相対する意見を持つ。韓国で社会的地位のある仕事に就くためには、高等学校でトップ数パーセントにいる必要があるという。そのために親は子供の教育に金をかけるのを惜しまない。

「韓国のすべての学校にPCを。都市部ではなくいつも格差のある地方から順に」との2002年の大統領が命じた。その結果韓国のどの学校にもPCとスクリーンが設置させている。方向性の是非は別として、国が国際社会でどういった位置づけで存在しようとするのか、議論し、決定すると、断固として実践する。そのために教育に金をかけるのは当然であるとする姿勢は、感心する。教育に金をかけない、子供と老人に金をかねない国は、最終的には滅びていくのではないだろうか。

韓国では、2008年から小学校1年生から英語教育が始まる。日本でも、議論が喧しい。日本の方向性、将来像も議論されないまま、英語教育だけ取り上げられる。日本は世界の中でどう生きようとするのか。どう存在しようとするのか。基本的なことを議論し、教育のあり方を考えていくべきである。

世界の中の日本像、そのために教育はどうあるべきか、今回の韓国視察を通して深く考える機会を得た。財団には深く感謝をしたい。

また、韓国の教育者が中国の英語教育は進んでいるというのを多々聞いた。ぜひ中国も視察みたいと思う。そういった機会をまた与えていただければ幸いである。